

特別寄稿（追悼）

進藤咲子先生への感謝

松 沢 弘 陽

進藤先生から教わったことは数多い。ここでは先生の経験の直話と
してうかがった、これまでおそらく知られること少ない、先生の戦争
経験とそれがもたらしたものについて記したい。

太平洋戦争の戦争経験ということばは、よく使われるが、先生のそ
れにはまた特別の重さがある。先生の父上は犬養毅に傾倒して一九三
六年秋田県第一区から代議士に出た石川定辰氏、母上は日本女子大学
校卒、白百合女学校で数学を教えていられた。

当時の小石川区駕籠町（現在の文京区本駒込）に暮っていた石川家
の生活を大きく狂わせたのは、一九四五年五月二十五日―二十六日にか
けて襲った、山手大空襲として東京大空襲と並び称される米空軍による
夜間都市無差別爆撃だったと思われる。石川家は火の手に包まれた家
から逃げて、近隣の人とともに逃げ場を求めて豪邸の門を叩いたが開
けてくれず、教会に助けを求めたら会堂を開放してくれ、ようやく一
夜を凌ぐことが出来た。翌朝石川家があった場所にもどって見ると、
家は灰燼に帰しており、ピアノに組み込まれていた鋼線が光っている

だけだったという。当時東京女子大学の最高学年に在籍されていた先
生が、鉄道が運転を停止した線路を歩いて、東京女子大に行かれたと
いうのも、この大空襲直後の母校の様子を見に行かれたのではないか。

しかし先生のご家族が米空軍による都市無差別爆撃によって失われ
たのは、家や家財にとどまらなかった。先生によれば、先生の唯一人
の妹さんはこの年の六月になくなられたという。父上も一九四七年に
なくなられた。先生は、日本の典型的な家族の「大黒柱」と唯一人の
姉妹を失なわれたのである。廃墟の中でそれまでの家族を失い、母子
二人が残された先生は、これから母を支えて二人で生き抜かなければ
ならないと確く決心されたという。

この時先生は二二歳である。私には、この決心こそが先生にとつて
の太平洋戦争の経験の核心であり、この決心は先生の「戦後」そして
生涯を通じるいわば原経験として、曲折に満ちた先生の生を導き、豊
かにしていったように思われる。

一九四五年九月東京女子大学を卒業された先生は、ただちに、秋田

県能代高等女学校に勤めて翌年一〇月にいたっている。女学校は東京の白百合に学んだ先生が、能代の女学校に職を求めたのは、秋田出身の名士であった父上の縁故を頼られたのではないか。半年余の間を歩いて一九四七年六月には川崎市立生田中学校教諭になられて一九四九年三月にいたっている。東京女子大学を卒業されてから三年半、先生の二〇歳から二四歳までの勤めの変動は、同時代の教育制度の変化と先生母子にとっての生活の厳しさをともに語っているように思われる。その変動にピリオドをうち新しい道を開いたのが、一九四九年四月、前年一二月に開設されたばかりの国立国語研究所に、日本近代語担当の所員として採用されたことである。

前年末に発足したばかりの新しい国立研究所での最初のスタッフの採用人事は相当冒險的なものではなかったろうか。東京女子大学を繰上げ卒業してまだ四年、二四歳、そして新教育制度では中学校しか教えたことがない。その人事を断行したのは、先生のすぐれた才幹を見抜いた人の存在であろう。私は先生の資質と可能性をとらえた学界の有力者の役割を思わずにいられない。想像であるが、西尾実先生のような方の存在は大きかったのではなからうか。

先生は国語研究所に入られた翌年、進藤善之氏（よしのぶ）と結婚して進藤姓を名のられた。翌年にはお嬢様（今日の川上彰子様）に恵まれた。だが新しい生活は平坦なものではなかった。夫君善之氏は病をえられ、進藤先生は、夫君の療養のためを考えて、上北沢に家を建てられ、先生自身も終生そこに住まれることになったと聞く。

国語研究所員として学問の専門家としての道を踏み出すのは、先生にとっての大きな幸運だったが、人なみの平坦な道ではなかった。母上の支えがあったにせよ、夫君の病をささえ、お嬢さんを育てるのは容易なことではなかったろう。いつ頃のこととしてうかがったか、記憶が定かではないが、日中の研究だけでは足りないとして、夜床に就かれても、胸のあたりに小さな机を置いておられ仕事を続けられたことがあると聞く。先生にとっての専門研究と家族の生活との両立が、同時代の中でもどんなに厳しいものであったかがうかがわれる。

以上は戦争経験を核にして生き抜かれた生のかたちであり、学問という営みを超えて貴重な意味をもつのではないか。東京女子大学に学んだ人の経験として、大学が先生にお話を伺って一冊の冊子に記録して下さったかどうか。私は大学の要職の方に提案したがはつきりしたお返事はいただけなかった。

先生は一九九三年に東京女子大学を定年退職なさっているが、一九八八年に丸山眞文庫が創設されたことによって、先生の学問のごく一面に限られて来た私たちとの交わりがさらに開かれた。先生のライフ・ワーク『文明論之概略』草稿の考察』（福沢論吉協会、二〇〇〇年）を命がけて書いたというお話もうかがった。また、丸山文庫基金創設とともに五〇〇万円を寄付され、「もっと出したいけど、私もまだ生きなきゃいけないから」とおっしゃった。その後、「予定しないお金が入ったから」と二〇〇万円あるいは二五〇万円追加するというご意向をうかがった。母校のために尽すことこの上なく篤いというべきで

あろう。「佐野知子東京女子大学事務局長は寄付関係の書類を全て点検して下さった上でこのいわば追加に当る寄付の記録は確認できなかったとお知らせ下さった。進藤先生は東京女子大学に追加して寄付をするつもりでおられ、何かの事情で実現しなかったのかも知れない。私が記憶するところを記すとともに、佐野事務局長の行き届いたご調査に深く感謝する」。

その一方で先生は、大学の首脳部とその政策について、時に歯に衣を着せぬ厳しい批判をのべられた。丸山文庫協力の会のメンバーは、東京女子大学の学内政治には一切立ち入らないという立場をとっていたから、進藤先生の大学批判について踏み込んでたずねることを避けたが、それはまことに激しいものだった。

一方で理財の能に裏づけられた、巨額の貯えの母校への惜しめない抛出。同時に母校の現状への厳しい批判。丸山文庫で机を共にして仕事をしていた平石（直昭）兄と私は、少し大時代おおじだいだけれど、こういう方を女傑というのではないだろうかと言ったことがあった。今この「女傑」論を記しながら思うのは、このような傑出した人が生れたのは、米軍の夜間無差別爆撃の後、母上と二二歳の先生だけが生残った時の、二人で生き抜こうと決心された精神が、お二人にとつての戦後の変動に耐えて発展し続けて産み出したものではないか、という思いであった。

付記 東京女子大学非常勤講師、東京女子大学丸山眞男文庫のスタッフの中心の一人として働かれる山辺春彦氏は、健康を損じてエンピツの手書で送った本稿について表記の誤まりの訂正をはじめ、石川定辰氏、進藤先生の国立国語研究所までの職歴などについて詳しい調査を下された。また川上彰子氏からのご訂正についても私にかわって対応して下さいました。記して心から感謝する。